

平成23年度第6回（通算第42回）山口国際文化学研究会（第1回大学院合同研究会）資料

文学の快樂—読む快樂、描かれた快樂— あるいは悲しき温帯 (時間があれば「創作する快樂ppt」)

国際文化学研究科 川口喜治(中国文学研究室)

①前口上

演壇の皆さんが「しあわせ、幸せ」をタイトルに入れられる中、私だけがそうではない生来の天の邪鬼ぶりが早速露呈しているが、「しあわせ」を格好つけて「快樂」に置き換えたにすぎない。それはさておき、「しあわせ」が今回の大学院合同研究会のテーマであるが、「しあわせ」とは何か。

「しあわせ」を定義するには、その反対概念である「しあわせでない」ことが決まっていることが前提となる。しかしながら、残念なことに「しあわせ」「しあわせでない」ことは、人（あるいは「生きとし生けるすべてのもの」といってよいかもしれない）それぞれによって違っているはずであり、たとえ「最小公約数」的なそれが存在したとしても、それを言い当てることは、少なくとも私にとって、大変困難である。

つまり、「しあわせとは何か？」という問いは、問題設定自体が間違っているのではないかと、思うのである（←かなり弱気）。

同様に私がタイトルとした「快樂」も、「非快樂」が定義できない以上、テーマ設定自体が間違いなのである。しかしそれでも、人、生きとし生けるすべてのもの、は「しあわせ」「快樂」を追い続け、「ふしあわせ」「非快樂」に苦悩する。

論理が飛躍するが、このような不条理極まりない言語の世界の住人のちっぽけなひとりの存在として、ここでは、**文学に描かれた「しあわせ」「快樂」「ふしあわせ」「非快樂」を、そしてそれを読む、解釈する「しあわせ」「快樂」「ふしあわせ」「非快樂」について、実存的に、つまりここでは自己満足的に、私なりのお話しをすることしかできない。**

(以上の大部分は、土屋賢二といしいひさいちの諸著作によって学んだものである)

偉そうなお託をつらつら並べたが、ここで、私は、とりたてて哲学的、論理的な言説を披瀝するつもりもないし、もとよりそのようなたくらみの力量もない。ここにいる皆さんならば、一度は触れられたことがある著名な作品（中国古典詩）について、おそらく、多分、きっとまだ述べられていない（でほしいと願

う) 解釈を私見としてご笑介 (←自分自身で笑っている) し、責めを塞ぐまでである。

作品に描かれた「快樂」と「非快樂」を解釈すること、またその「解釈行為自体」が、私にとって、「快樂」であるにすぎない。ここで私が提示する解釈が皆さんの賛同を得なければ、つまり「解釈の共同主観的存立構造」が成立しなければ、そのこと自体は、私にとって極北の「非快樂」となる。

② 作品

「代悲白頭翁 (白頭を悲しむ翁に代わりて)」

唐 (618-907)・劉希夷 (りゅう・きい 651-679?)

〔作品のあらすじ〕一朝病に倒れた白頭の翁が、落花とそれを惜しむ若い娘たちとをまのあたりにし、自らの青春の歡樂を回想するなか、人すべてが年老いること (時間の推移によりもたらされる悲哀) を悟り、悲しむ。

- | | |
|------------------|-------------------------------------|
| 01洛陽城東桃李花 | 洛陽城東 桃李の花 |
| 02飛來飛去落誰家 | 飛び来たり飛び去り 誰が家にか落つる |
| 03洛陽女兒好顔色 | 洛陽の女兒 好顔色 |
| 04坐見落花長歎息」 | 坐 <small>そざろ</small> に落花を見て 長く歎息す |
| 05今年花落顔色改 | 今年 花落ち 顔色改まり |
| 06明年花開復誰在 | 明年 花開き 復た誰か在る |
| 07已見松柏摧爲薪 | 已に見る 松柏の摧れて薪と爲るを |
| 08更聞桑田變成海」 | 更に聞く 桑田の変じて海と成るを |
| 09古人無復洛城東 | 古人 洛城の東 <small>かえ</small> に復る無く |
| 10今人還對落花風 | 今人 還<small>ま</small>た落花の風に對す |
| 11年年歲歲花相似 | 年年 歲歲 花相い似たり |
| 12歲歲年年人不同 | 歲歲 年年 人同じからず |
| 13寄言全盛紅顔子 | 言を寄す 全盛の紅顔子 |
| 14應憐半死白頭翁」 | 応 <small>まさ</small> に憐むべし 半死の白頭の翁を |
| 15此翁白頭真可憐 | 此の翁 白頭 真に憐む可し |
| 16伊昔紅顔美少年 | 伊れ昔 紅顔の美少年 |
| 17公子王孫芳樹下 | 公子 王孫 芳樹の下 |
| 18清歌妙舞落花前 | 清歌妙舞す 落花前 |
| 19光祿池臺開錦繡 | 光祿の池臺 錦繡開き |
| 20將軍樓閣畫神仙 | 將軍の樓閣 神仙 <small>えが</small> を画く |
| 21一朝臥病無相識 | 一朝 病に臥して 相識無く |
| 22三春行樂在誰邊」 | 三春の行樂 誰が辺にか在る |
| 23宛轉蛾眉能幾時 | 宛轉たる蛾眉 能く幾時ぞ |

24須臾鶴髮亂如絲 須臾たる鶴髮 乱るること絲の如し
25但看古來歌舞地 但だ見る 古來 歌舞の地に
26惟有黄昏鳥雀悲 惟だ黄昏の鳥雀の悲しむ有るのみを

*** 希夷善琵琶、嘗爲白頭詠云、今年花落顔色改、明年花開復誰在。既而悔曰、我此詩似讖、與石崇白首同所歸何異、乃更作云、年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。既而歎曰、復似向讖矣。詩成未周歳、爲姦人所殺。或云、宋之間害希夷、而以白頭翁之篇爲己作、至今有載此篇在之間集中者。**

* 希夷 琵琶を善くし、嘗て白頭詠を爲して云う「今年 花落ち 顔色改まり、明年 花開き 復た誰か在る」と。既にして悔いて曰く「我が此の詩 讖に似し、石崇の『白首の歸する所を同じうせん』と何ぞ異ならんや」と。乃ち更に作りて云う「年年 歳歳 花相い似たり、歳歳 年年 人同じからず」と。」既にして歎じて曰く「復た向の讖の似し」と。詩 成りて未だ周歳ならざるに、姦人の殺す所と爲る。或いは云う、宋之間 希夷を害し、而して白頭翁の篇を以て己が作と爲すと。今に至りて此の篇を載せて(宋)之間の集中に在る者有り。

(『全唐詩』卷82)

③ 自己満足的解釈行為の一例

(翻案です。念のため)

「白髪頭のおじいちゃんの気持ちになって詠んだ歌」 劉希夷

- 01水と商人の都なにわにごつつ咲いとる造幣局の通り抜けの八重桜も
02季節すぎたら あっちゃこっちゃんに飛んでいって どこに落ちるんかいな
03べっぴんばっかしのなにわのおねえちゃん
04何とはなしに散る桜見て ながーいため息
05そのはずや 今年桜が散ったら またひとつ歳とるさかい おねえちゃんの化粧ののりも悪ろなる
06来年 桜咲いたとき 今のようにぴちぴちとは限らへんから
07バブルの時に山削り その木使こうて たくさん建物たったなあ～
08大阪湾埋めたてて 新空港もできたし
09当たり前やけど 昔の人は死んでもうて ここにはおらへん
10今は 今のべっぴんさんが 春風に散る桜の見物
11毎年毎年同じ花咲くけど
12毎年毎年見るのはちがう人
13ちょっと聞いてや そのイケメンのおにいちゃん
14死にかけの白髪頭のおじいちゃんに同情たってえなあ
15このおじいちゃん ほんまかわいそうなんやで

16むかしは おにいちゃんみたいにおっとこまえて

17北の新地でぶいぶいいわしてたんや

18桜散る季節 ディスコで黒服やDJもやっとな

19えらさんとこの虎革の絨毯の上で遊んだこともあるし

20その筋の人にも顔がきいて 酒をおごられたこともあったんや

21そやけど あそびすぎがたたって突然ダウン 金の切れ目が縁の切れ目で

22あの頃の羽振りはどこへやら ちゅーうこっちゃ

23おねちゃんの話しの戻るけど バブルの時にはやったハウスマヌカンみたいなぶっとい眉毛はどうしたんやろ

24あっとゆうまに中途半端な茶髪に白髪まじったヒョウ柄を着た千林（注）のおばちゃん

25いまもむかしも バブルのあとは

26どこもかしこも閑古鳥や おもろうてやがてかなしき ちゅーとこやな

（注）千林：京阪沿線の商店街。大阪のおばちゃんという極めて特殊な部類に属する生物の生態観察において、ここ或いは天神さんで有名な黒門市場の商店街が、最も正確なデータを蒐集し得る学術的フィールドワークのトポスである。なお、京阪本線・千林駅を降りると正面にあるドラッグストアは、もと「主婦の店」即ちダイエー1号店。ちなみにダイエーは、同じく京阪沿線の門真^{かどま}（昭和最高の男性演歌歌手・村田英雄が終の棲家とした）に本社を置いた松下電器産業の家電製品の定価設定販売に対して、値引きというかたちで、その商法を崩すしてゆく。結果、それが、現在のオープン価格が確立する一因となる。京阪沿線は、いつもホットなのである。

この作品には、すでに昭和の大詩人・三好達治の名解釈が存在する。岩波新書『新唐詩選』（吉川幸次郎共著・1952年）。この大詩人の解釈を前にして立ち竦む足を踏み出さなければならない。これはしんどいが、何か新たな発見があれば、やはり嬉しい、快樂である。

この作品は第11・12句「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」の二句によって有名ではあるが、私は、まず、その第10句目の「今人還對落花風」に注目したい。つまり、ここは、今の若い人も、かつて翁が紅顔の青年であった時と同様に、気づいていないだろうが、一見絢爛たる風景であるが実は無常の象徴でもある風に吹き散る落花の前に居るのであるということを歌っているのである。そして、これはまぎれもなく、第03・04目の「洛陽女兒好顔色、坐見落花長歎息」と対応している。

次に、私は、第18句目「清歌妙舞落花前」に、最もおもしろさ（解釈の快樂）を見い出したい。これは、白頭翁が、青年なりし頃の「快樂」を回想する場面の一コマであり、このシーンは、一見やはり過去の華やかさだけを描いたよ

うではあるが、「落花前」に重点を置けば、別の捉え方ができるように思われる。

すなわち、「落花」は「青年だった翁」にとっては歌舞をいろどる華やかなものにすぎなかったのであるが、現在の翁にとっては、「年老いる」という「非快樂」の象徴にほかならないわけであり、当時の翁はそのことにももちろん気付かなかったが、今そのことに気付いた。つまり翁は、青年の頃すでに、ほかならぬ自分が、年老いるという「非快樂の原理（ことわり）」に支配されていたのだということに気付いたのである。

そして、そのことに気付いたことによる一種のおののきを、我々は読みとることができまいか。

ちなみにこのシーンを映像化するならば、全体をセピア色にし、落花だけをカラーにして画面いっぱいに散らせたいところである。

ところで、すぐに実体論的論調にはまってしまう中国文学研究者（少なくとも私）の性癖をご容赦願いたいのだが、作者、劉希夷は、三十歳を俟たずに、つまり自ら「白頭翁」となることなく、この世を去っている。しかし、李燕捷『唐人年壽研究』（文津出版社・1991年）の統計するところによれば、唐代知識人の平均寿命は三十歳前後であるという。さらに、「大夫七十而致事（「致仕」と同義）。……適四方、乘安車、自称曰老夫。」（『礼記』曲礼上・『正義』卷1）、「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」（杜甫「曲江二首」其二、『全唐詩』卷225）の通り、「七十」の尊ばれ方から逆に考えれば、現代の私たちの「三十」と当時とは、捉え方が異なっているはずである。このような年齢に対する感覚を、知の地層から掘り起こす作業を前提としなければならないが、劉の「白頭翁」に対する親近は、私たちのそれよりも、大きかったのかも知れない。

④ 後口上

ここに描かれた歡樂とそれに対極する老醜ともいうべき悲哀は、我々が生きる温帯特有の四季があることに起因する「快樂」と「非快樂」にほかならない。副題の副題に、悲しき温帯と称した所以である。

また附言するならば、原文の最後「*」の箇所を示したように、説話には、劉希夷は、「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」の二句を作ったことが原因で、殺されたという。そのような三十歳に満たない死は、比喩的に言うならば、万物の創造主から賜もうた言葉を用いて、しかもあまりにも平易な言葉によって、創造主の作り賜いし人間世界の、快樂と非快樂の「真理」を直截に言い当ててしまったことに対する処罰なのだろうか（真理を括弧書きにして、疑問型にしたのは、真理は言い当てることができないと考えるからである）。

また現存する詩歌は35首のみ。少し時代が下る李白（401-762）、杜甫（712-770）が、1004首、1455首と千首以上の作品を今に伝えるのに比べて、あまりにも少ない。印刷技術が無く書写や口碑として、現在の文献資料が伝えら

れていた時代であり、彼の死後に安史の乱という唐帝国全土に及ぶ大事変による文物の大破壊があったことを差し引いても、また三十歳まで生きなかったことを考慮に入れても、少ない。劉の他の作品に対する分析を俟つまでは、軽々に述べるべきではないが、一首一首の言葉の操りに生命力を削ぎ落としていったのであろうか。私は、ついついこのような例に出くわすと、短篇しか書けなかった芥川や織田作を思い浮かべてしまう。

我々が住人として生きる言語の世界は、かくも「おもろうてやがてかなしき」ものなのだろうか。答えは出ない。

⑤ 附 録 : 批 評 す る 快 楽

発 表 ! ! ! 中 国 文 学 ベ ス ト ナ イ ン

1 番バッターは、俊足好打の**李白**。他の追隨をゆるさない創造的バッティングで、出塁率抜群。軽妙で機知に富んだ即席詩には駄作がない。また長編の物語詩は、4 番を打てる実力十分で、この人が1 番にすわるのは、相手ピッチャーにはプレッシャーが大。守備はライトだが、守備範囲はセンターまでに及ぶ広さ。ノーバウンドで本塁に届く矢のような送球に球場全体が拍手喝采する。背番号は、5 1。

2 番は、いぶし銀の**陶淵明**。地味だが堅実なプレーで玄人筋をうならせる。ただ引きこもりがちで、球場に来ずに家で酒を飲んでいることが多い。守備はセカンド。ファインプレーを普通のプレーに見せてしまうのが、にくいところだ。背番号は、6。

3 番は、老若男女すべてに人気のある、ドラフト1 位、入団即レギュラーの花形選手、**三国志演義**。義理人情あり、権謀術策あり、はたまた妖術ありと、その絢爛豪華なプレーはファンを陶醉させる。守備は、もちろん、左・ホットコーナーのサード。背番号は、3。

4 番は、杜甫ではなくあえて**蘇軾 (蘇東坡)**。ひとり文学のみならず絵画・書道など諸芸術、はては料理までをこなすマルチタレントぶりは、かのダビンチと双肩。あやうく死刑になりかけたり、はるか海南島に流されたりなどの挫折と修羅場を経験しているだけに、そのプレーには深みがある。抜群のIDは、かなめのキャッチャーに最適。背番号は、1 9。

5 番は、**魯迅**。近現代文学の父である彼の作品は、その豊かな古典的教養に裏打ちされている。所属チームだけではなく、野球全体、さらにはスポーツ全体の発展と幸福を願うという痛ましいまでの使命に燃えるその姿は、先輩の杜甫を継承する。守備はレフト。背番号は、8。

6 番は、悲劇の詩人・**曹植**。杜甫入団までのエースで、打力も抜群。プロ野球はこの人にはじまったといっても過言ではない。プロ野球以前の民間野球の経験をあわせ持つだけに、荒削りで即興的なプレーはオールドファンを魅了する。エースの座を譲ったとはいえ、強肩は健在で、守備はセンター。背番号は、5 5。

7 番は、**水滸伝**。百回本、百二十回本、七十回本と臨機応変の打撃は単なるスイッチヒッターの域を超えており、李白不調の時には1 番に抜擢される。続々と登場する主人公＝百八人のアウトローたちの多彩さと機敏性は、華麗なショート守備に遺憾なく発揮されている。背番号は、2 3。

8 番・ファーストという、地味なひと席は、中国文学のはじまりである**詩経**にささげるべきであろう。技術的には現代野球には及ばないものの、その素朴で基本的なプレーは、技術や戦略ばかり追求されるプロ野球に慣れてしまった私たちファンの眼に、まばゆいばかりの輝きを放っている。背番号は、1。

9番は、エースで4番も打てる**杜甫**。その強靱な精神により様々の伝統を超克し、中国古典詩の頂点に到達する。社会批判詩に見られる歯に衣着せぬもの発言は彼の反骨さのあらわれであり、しばしばマスコミを騒がせる、というより彼自身がマスコミでもある。天才であることは否定すべくもなく、守備はずしんと重い球が特徴のピッチャー。背番号は、伝説の永久欠番・14。